教育実習前に必要な学びについての提案
―附属学校教員及び学生への質問紙調査から

南　　伸昌・浅川　邦彦・久保田善彦

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第5号　別刷

2018年8月3日

教育実習前に必要な学びについての提案
－附属学校教員及び学生への質問紙調査から†

南　　伸昌*・浅川　邦彦*・久保田善彦*
宇都宮大学教育学部*

教育実習Ⅱと大学における学びとを有機的に結びつけることをねらいとして、教育実習Ⅱ実施直後に実習生及び附属小中学校教員に、実習前に必要な学びなどに関する調査を行った。学習指導案、模擬授業、子ども理解等、定番ともいえる課題の重要性を新たにする結果となったが、学生が統一感を持って学びを深めることのできるカリキュラムの構築について提案する。

キーワード：教育実習、学習指導案、模擬授業、授業観察、子ども理解

1. はじめに

教育実習と大学における学びの往還は、教員養成課程の古くて新しい課題である。また近年、教育実習中に不適合を起こす学生が、少数ながら毎年のように出る現状もあり、大学での学びをステップとし、教育実習に滑らかに入っていくことのできる、学修の流れの構築が求められている。

宇都宮大学教育学部では、平成30年度から教育実践カリキュラムが順次改訂されていくが、それを機会に大学の授業と教育実習とを有機的に結びつけるための検討が進められてきた。その中で、教育実習Ⅱを経験した直後の3年生と、その指導を終えた附属小中学校教員に対して、教育実習Ⅱまでに大学で何をどのように学べばよかったのか、大学での学びに足りないものは何かという調査を行った。調査の結果から、教科教育法の授業担当者を中心とする大学教員が、教科は違っても共通して心掛けるべき項目などが明らかとなった。

調査は、平成29年度の教育実習Ⅱ修了後の10月に、教育学部3年生全体及び附属小中学校教員に対してアンケート形式で実施した。3年生に対しては、各分野担当教員に用紙の配布・回収・集計を依頼し、12分野中9分野から回答戴いた。附属小学校は各学年主任の教員に、附属中学校は各教科主任の教員に、各区分で調査・集約を依頼した。

2. 調査項目と結果

3年生及び附属小中学校教員に対して行った調査の、質問（丸数字）及びその回答を集約したもの（表もしくは箇条書き）を以下に記す。頻度は記述内容から抽出した学びのキーワードや項目の出現数で、3以上のものについて表に示した。

(1) 3年生

①教育実習を行って、「受けていてよかった」と思った大学の授業科目及びその概要を教えてください。

表Ⅰ．3年生質問①の回答結果

科目区分　頻度	「主な科目」　キーワード　頻度
初等教科教育法※ 19	「体育」、他 指導方法　9、学習指導案　8、 教科の内容　6、模擬授業　5
中等教科教育法※ 49	「数学、理科、家庭科」、他 模擬授業　19、学習指導案　18、 教科の内容　15、子ども理解　10、 指導方法　6、教材研究　3
初等教科　7	教科の内容　3、指導方法　3、 子ども理解　3
分野専門科目　23	模擬授業　6、教材研究　6、 教科の内容　4、指導方法　3

† Nobumasa MINAMI*, Kunihiko ASAKAWA* and Yoshihiko KUBOTA* : Proposal for necessary learning before teaching practice - From questionnaire survey to affiliated school teachers and university students.
Keywords: teaching practice, study instruction plan, simulated lesson, lesson observation, child understanding
* School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：minami@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

専門導入 科目　13	「教育心理学」 子ども理解　7 「情報教育」 教材研究　3、 他
教育基礎 科目　5	「教育相談」、他　子ども理解　3
選択教職 科目　7	「小学校外国語活動の理論と実践」 模擬授業　6、指導方法　6
その他：教育実践　5、保育士　4	

※科目が「教科教育法」となっているものが5件あった。

②教育実習に入る前に知りたかったこと、できるようになっていればよかったことを教えてください。また、それをどのような機会で取り入れるべきかご提案ください。

表2．３年生質問②の回答結果

キーワード 頻度	内容　頻度	実施機会
指導方法 63	板書　29、教科等　10、子ども対応　5、教材　4、発問　3	初等／中等教科教育法
子ども理解 27	子どもとのふれあい　7、子ども対応　6、児童生徒指導　6、担当者間での状況共有　5	現場での体験
学習指導案 22		初等／中等教科教育法
模擬授業 20	通常の授業時間での実施　7 （経験値の向上）	初等／中等教科教育法
授業事例 10	授業観察　10	現場での観察
その他 8	実習中のスケジュール等の情報を早めに知りたい　5	

③その他、大学での指導に望むこと、気づいた点を以下に記してください。

・主な意見

模擬授業：機会を増やす。実践的な内容希望（話す練習、板書練習、児童指導の留意点等）。

授業観察:先輩実習生の授業を含む映像資料の活用。公開研観察。授業観察時のポイント・視点を明示した指導。

学習指導案：書く機会を増やす。作成した学習指導案の添削。専門外教科の書き方指導。

子ども対応：子どもの実態に応じた指導方法。

道徳、特別活動、小学校の外国語活動について実践的に学ぶ機会。

④「教育実習前に子どもの顔と名前、様子を把握できれば当事者意識が湧き、大学での学びから実習への繋がりも良くなる」という考え方についての意見。賛成8割、反対2割で、主な反対意見は以下の通り。

・実習が始まってから覚えるということも可能。

・先生も最初は、子供の名前・様子が把握できていない状態でクラスを持つ。

・初めと後での自分の生徒理解による授業の作り方というものについて考えることができる。

(2) 附属小／中学校

◇学習指導案について

①教育実習開始時点での、実習生の状況（身につけておいてほしかったこと等）について教えてください。

・指導案の理解：学習活動と支援の違いを理解し表現形式を区別する。目標／ねらいと評価と内容を一致させる。

・仕事に対する基本的な態度：責任感を持って当たる。独りよがりにならず資料や他人の意見も参考にする。文章作成能力。

・教科の基礎的知識や評価基準：教科書だけでなく指導要領の内容も把握する。

②附属小／中学校でのご指導において、特に重視した点を教えてください。

・子どもの実態に応じた、学習指導案の作成、指導ができること。

・授業のねらい／目標を明確にし、1校時の時間の中で展開を作ること。

③教育実習までに、大学の教科教育法等の授業で重視すべきことは何か、お考えを教えてください。

・導入、評価・支援、机間指導、意図的指名等を理解した上で、ねらい／目標を踏まえた授業づくりを行う。

・実際の授業をイメージ・参照して、学習者視点で授業を作ること。

・学習指導案を見たり授業観察をしたりする機会を増やす。それぞれの活動の意図も明確に示す。

・一人で責任を持って作業する習慣づけ。

◇授業実践（指導案の具現化）について

④教育実習開始時点での、実習生の状況（身につけておいてほしかったこと等）について教えてく

ださい。
・声の大きさや話し方など、立場に応じたコミュニケーションの取り方。
・子どもに丁寧に説明しようとする基本的態度：読みやすい字、判りやすいワークシート・板書計画。
・時間を守る意識。（小）
・教科に関する知識・理解。（中）

⑤附属小／中学校でのご指導において、特に重視した点を教えてください。
・子どもの実態に応じた支援ができること。
・確かな知識に基づいた授業づくり。そのために知識の確認を適宜行い、板書指導やねらいの明確化を行った。

⑥教育実習までに、大学の教科教育法等の授業で重視すべきことは何か、お考えを教えてください。
・授業観察により、授業の流れ、子どもの反応をイメージできるようにする。その解説。
・子どもの発達段階に応じた各教科の内容，指導法。
・模擬授業を行い、説明や教材活用の実際を体験しておく。
・教科の確かな知識・理解。

◇児童生徒指導（子どもとの関わり）について
⑦教育実習開始時点での、実習生の状況（身につけておいてほしかったこと等）について教えてください。
・積極的に関わって欲しい。ただ、言葉遣いや内容は、教師として適切なものを。

⑧附属小／中学校でのご指導において、特に重視した点を教えてください。
・全ての子どもとまんべんなく積極的に関わるよう努力すること。
・教師としての立場を踏まえた関わり方ができること。

⑨教育実習までに、大学の事前指導や授業で重視すべきことは何か、お考えを教えてください。
・教師として子どもに接するという自覚の強化。
・子どもに共感し、人間関係を構築できる態度の育成。

◇勤務態度、その他
⑩特に大学での指導に望むこと、お気づきの点を教えてください。
・社会人としての自覚：受け答え、規範意識、継続性。
・社会人としての態度：あいさつ、時間厳守、記録・提出物のレベル。
・節度を保ち、前向きに取り組める大学生活を送ることのできる環境整備。

3. 考察

附属学校教員のコメントを指導助言とし、3年生の意見を元に、大学での教育実習前教育について考えていく。

①②において学びのキーワード、「教科の内容」、「学習指導案」、「模擬授業」、「指導方法」、「教材研究」、「授業事例（授業観察）」、「子ども理解」を設定し分類を行った。①では「授業観察」の頻度が低く、表には現れていない。②では、「教材研究」が「指導方法」の中に「教材」として含まれている部分はあるが、他のキーワードに比べると頻度が低い。このこと及び自由記述の意見は、大学の授業において「教材研究」は比較的よく実施されているが、「授業観察」は機会の確保から始める必要があることを示している。

「指導方法」は②で頻度が一番高いが、①でも教科教育法や教科の中でよく出てきているキーワードである。②では「板書」が突出して多く、大学での授業づくり指導の中で、強化すべきポイントであるといえる。「教科」については道徳や特別活動、小学校の外国語活動についての指導の拡充を求める声が多く、「子ども対応、教材、発問」は、記述内容を見ると、実施の授業における活用／対応の方法を身に付けたいということであった。「指導方法」に分類される活動は大学の授業に多く取り入れられているが、学生が現場に出た際に活用できるレベルに到達させるのは難しいようだ。

「子ども理解」も大学の授業で多く扱われており、先生方が十分意識されていることが分かる。ただ、②の内容や自由記述を見ると、学生が求めているのは実際に子どもと触れ合う体験や、現場の教員とのコミュニケーションである。また、附属小中学校教員からも、「教師としての自覚を持った接し方」や「子どもに共感する態度」育成の助言をいただいたが、3年生ともなると、現場体験なしでこのような

学びを深めることは難しい段階に来ているとも考えられる。

「学習指導案」については、書く機会の確保を求める声が多かった。その上で、書いたものへの添削指導が求められていた。指導内容についてはいろいろな要望があるが、まずは書かせてみて、「教育実習の手引き」等を参考に、できるだけ添削指導するよう心掛けたい。ただ、丁寧な指導を行っていると、一つの授業で指導できる学習指導案の数は限られる。学生が経験する数についてはカリキュラム全体で確保するなどの工夫が必要であろう。

「模擬授業」、「授業観察」についてもその機会を増やし、経験値を上げたい段階のようである。しかし、「学習指導案」同様、やらせっぱなし／観させっぱなしではなく、時間意識や声の大きさ、分かりやすい教材や話し方など、実際の授業に即した指導が求められている。「授業観察」は実際の学校でなくとも、ビデオ教材などによる観察演習も有効なので、1、2年のうちから取り入れていけるとよいのではないだろうか。

附属小中学校教員にその他として、「大学での指導への要望等」を伺ったところ、「社会人としての自覚に欠ける態度が散見される」とのご指摘をいただいた。学生の自由記述の中にも複数、「学生へのマナー指導が必要」という意見があった。この辺りは学問以前の問題であり、日頃、学生との対応時に心掛けていきたいことである。そのためにも、「節度を保ち、前向きに取り組める大学生活を送ることのできる環境整備」を進めていきたい。

4. 結論

以上を元に、教育実習前教育の在り方についての提案を行う。

まずは学習指導案指導、授業観察、模擬授業の機会を増やす。ただ、時間を確保すればよいというものでもなく、それぞれの活動の時期や内容について、学修効果を高める工夫が必要である。

「学習指導案」については学生の意識が高まった教職入門後半辺りに、その意義や形式の説明を行い、初等教科や教科教育法で、それを踏まえた指導を数回程度入れる。そして、2～3年の然るべき時期に、ステップアップ的な講習会を全体に開く。そこでの学習内容を元に中等の各教科教育法等で指導を行って、教育実習Ⅰ・Ⅱに繋げていくことにより、学生が統一感を持って学びを深められるようにする。

「学習指導案」作成指導は、数をこなすことと、丁寧な添削指導とが求められている。学習指導案の共通項は全体の講習会で押さえ、初等／中等の教科教育法などでは、教科の特徴も踏まえた指導を一定数行い、全体として指導の数を確保する。そして、受講生の多い科目については、グループ活動なども活用し、作成した学習指導案を丁寧に添削指導して、学生の学びを深めていく。

「授業観察」については、教職入門の全体活動1（1年11月）と事前指導1（2年9月）で学年全体にその段階に応じた、ねらいや観点、活動方法についての講習を行う。教科教育法などにおいて、その内容を踏まえた上で、ビデオによる授業観察演習を1回程度入れることにより、全体として学生の経験値を上げることができる。

「模擬授業」を実施するタイミング・流れは、学習指導案指導や授業観察演習と絡めて決めることになる。時間意識や発声に始まり、子どもの実態に応じた説明、正しい知識に基づいたねらいの実現、評価・支援、そして板書やワークシートまで、学生が学び、体験すべきことは多い。しかし、やはり一つの授業には時間の制約があるので、実施数や指導の観点を絞り、カリキュラム全体で経験の数と質を高めていくという体制が必要となる。

「子ども理解」については、「教育心理学」や「教育相談」で理論的な側面も含めて学ぶ。上記3活動の中で、指導側がそれを意識した形で指導を行うことで、「現場に即した指導」に近づくのではないだろうか。

以上のようなことを実現するために、2019年度に教職ボランティア入門が導入され、2020年度から教育実習Ⅰが3年前後期での授業観察を中心とした活動となる。従来よりも、「子ども理解」や「授業観察」の機会が確保される見通しとなったが、その活動を大学での学びと有機的に結びつける重要性は全く変わらない。統一感を持って学生が学びを深めていけるよう、カリキュラムの見直しを進めていきたい。

平成30年3月28日 受理

Proposal for necessary learning before teaching practice - From questionnaire survey to affiliated school teachers and university students

Nobumasa MINAMI, Kunihiko ASAKAWA and Yoshihiko KUBOTA